

## 熱帯アフリカで歳時記を読む

大石高典

アフリカで俳句を作ることには、どんな難しさと可能性があるだろうか。このエッセイでは、私自身のアフリカへの滞在経験をふまえて考える。

私は、大学で人類学を研究している。これまで一一年間、毎年アフリカ中央部のカメルーン共和国に通っている。カメルーンは、西アフリカに大きく喰いこんだギニア湾の奥にある。日本では、サッカーで有名なカメルーンは、四七五、四四〇平方kmと日本の一・二六倍の国土面積のなかに、海から標高四、〇〇〇mを越える高山帯まで、年間雨量が〇に近い乾いた北部の沙漠からサバンナを経て一五〇〇―三〇〇〇mm以上にもなる南部の湿った熱帯雨林まで、アフリカで見られる自然環境がすべて含む。多様なのは自然環境だけではない。なんと、二五〇以上の言語を話す人々が住んでいる。比較的小さい面積の中に多様な自然と人々。俳句をするのに絶好のシチュエーションである。日本で俳句を始めていた私は、いつの間にかフィールドワークにポケット・サイズの歳時記を持参するようになっていた。

俳句は世界一短い詩の文化として有名で、イギリス、フランス、アメリカなど欧米では、それぞれの言語を使った俳句活動が独自の展開を見せている。これらは、先進国であり中緯度に位置する北の国々である。

日本に近いアジアに目を向けてみる。熱帯アジアを題材に俳句が詠まれなかったわけではない。とくに東南アジアは、戦前戦中にかけて日本人が「南方」に多く旅行したり、住んだ時代に盛んに詠まれ、「南洋俳句」というジャンルさえ作られた（土屋 二〇〇三）。昭和初期に洋行の途上でシンガポールに立ち寄った高浜虚子は、熱帯を題材にした句を作り、自らの編になる旧版『新歳時記』（三省堂）に「赤道」、「象」「水牛」「極楽鳥」など少なくとも三五の熱帯季語を盛り込んだが、敗戦後の改訂でそれらは削除された（福井 二〇〇九）。これらの動きは第二次大戦に至る日本の南下・植民地化政策の結果と結びついていることは疑いない。「熱帯季語」はすべて「夏」に分類されていた。虚子は、日本の季感で熱帯の事象を詠むことを前提としていた。しかし、地域ごとの季節や時間ありようを無視して、日本を基準に据えようとする考え方は、俳諧の重んじる繊細な自然観察を信条とする作句の態度とは矛盾をきたすものだった（松井 二〇一〇）。

では、アフリカはどうか。熱帯アフリカでは、東南アジアと違って、日本とアフリカの間には直接的な植民地・非植民地の関係は形成されてこなかった。

南北アメリカ大陸とも異なり、日本人がアフリカに大規模に移民したという歴史もない。アフリカと俳句は、第二次大戦後になって、国家の枠組みにしばらくれない、より直截的な出会いを経験したのである。アフリカ俳句の初源は、例えば、一九六〇―七〇年代に学術調査隊のメンバーとしてアフリカに入った当時の日本人研究者の記録から知ることができる。

一九五〇年代から、今西錦司とともにゴリラやチンパンジーなどの大型類人猿調査のためにアフリカ調査を開始した伊谷純一郎は、タバコをふかせながらサバンナをぐんぐんと歩いてゆくので、アフリカ人から「機関車」と綽名されていた。伊谷は、熱帯森林やサバンナへのサファリ（徒歩旅行）に、『芭蕉連句集』を携え、夜テントの中で繰り返し読んでいたという。篠原徹は、「自然の全体が自然の部分たる現象に凝縮する瞬間」を捉える醍醐味において、俳諧と地道な自然観察をベースにした伊谷の徹底したフィールドワークを手法とした研究に関連性を読み取る（篠原二〇〇九）。

数多くあるアフリカの言語、とくにバンツール語には、日本語のように音節が区切れるものが多く、五・七・五の音韻で詩を作ることができそうなものがある。例えば、地域共通語になっている東アフリカのスワヒリ語や中部アフリカのリンガラ語もそれに該当する。実はアフリカ語で俳句を作る試みは既にアフリカ調査の初期のころに試みられていた。

旧ザイルで焼畑農民に関する文化人類学的な調査を行った米山俊直は、初期の現地調査について綴った『ザイル・ノート』の中で、一九六〇年代後半から一九七〇年代前半に、ザイル東部で言語や文化の調査を行う日本人研究者が宿舎で句会を開いたこと、スワヒリ語による句作に挑戦したことなどを書いている。ただし、句会に興味を持ったアフリカ人が現れたのかどうかまでは書かれていない。同書に掲載されているキングワナ語というスワヒリ語の方言で作られた「キングワナ俳諧」は、次のようなものだ（米山一九七七…一五三―一五七）。

ヴエラワナリヤ    ングルモムバリ    ハイジャネシヤ

（蛙啼き遠雷ありて雨いまだし）

湯川恭敏

（訳…米山俊直）

ニメキシヤ    サウチャマカリ    イコシンバ

（吠え声のひとときわたかくライオンいる）

梶茂樹

俳句にとつての海外吟の可能性を主張する有馬朗人は、海外吟を旅吟と生活吟に分けてその違いを述べている。旅吟は、海外旅行で出会った非日常の景を詠むものだが、生活吟には、居住地への長期間の定着生活の中から生まれる発

見が詠みこまれる。一年以上アメリカに在住した経験をもつ有馬は、長期間住みこむことよって、生活環境と詠み手の相互作用のなかから「生活者の眼が生きる」句を生み出すことができるという（有馬二〇〇〇）。「生活者の眼が生きる」とは、どういうことだろうか。周りの世界が単なる外国やエキゾチズムの対象ではなくなり、身体化され、そのような内在化した視点から得られる観察が、モノやデキゴトを核に言語化されるプロセスだととらえることができるだろう。そして、その手掛かりになるのが、季語や季語に変わりうるなにかなのである。

野外科学である人類学では、短くて数か月、長くて一年以上もこと定めた調査地に住みこむ。そして、人々と生活をともにしながら文化や社会について学ぶ。したがって、俳句は必然的に生活吟になる。

なりんぎよ かしおりんぎて むぶらなむぶら（リンガラ語）

かつば

（私はあなたをあいしているのに片想ひただただ雨が降っている）

私はカメルーン東南部の熱帯雨林地域に調査に入った。歳時記を持っていったものの、生活や調査で余裕がなく、現地と日本を行き来する何年間かは落ち着いてそれを開くことはなかった。研究対象とするバクウエレ人の言語には辞書がなかった。そのため、研究の便宜のために二〇〇四年に語彙調査を行って約二〇〇〇語を集め、簡単な辞書をつくる作業をした。そのとき、自然と歳時記に手が伸びるようになったのである。

かつて、「熱帯季題小論」を記した虚子だけでなく、いまだに多くの日本人には、熱帯には季節がないとか、あつても微細であるという先入見がつよい。しかし、実際に熱帯に暮らすと、それは思い込みだとすぐ気付く。【熱帯夜】というが、少なくともアフリカでは、昼間の日向は温度があがるが、朝晩は涼しく過ごしやすい。昼日中でも、ヤシの葉葺きの家屋の中や、森の中は涼しいままである。むしろ、日本の夏の方がはるかに蒸し暑いのである。

空焦がすゴジラの嘆き熱帯夜 うらたしおん

バクウエレ文化では、一年に季節は五つある。そのうち四つは二つの雨季と二つの乾季に対応し、大乾季の始まりの年末年始の時期は格別に寒いので、パングニと呼ばれる。大乾季には森から水が引き、川の水も少なくなつて、半落葉性の樹種は【落葉】して、冬に通じる風情を醸す。大乾季の間に【焼畑】を開くための伐開をし、小雨季の来る前に火入れをして焼畑をこしらえる。あちこちから細い筋で立ち上る火入れのけむりは飛行機の上からでも確認できる。

乾季は漁労【キャンプ】のシーズンでもある。丸木舟をつくり、家族で川を遡って連泊しながら魚を獲る。男たちは、【夜振り】で大物を狙い、女性や子供たちは小川や池をかいぼりする【川狩り】で大活躍する。

鰐の眼のざらり光つて夜振りかな 高典

小雨季になると葉を落としていた木々の【芽】が吹きだす。春の風情に通じるものがある。小雨季には【マンゴー】が成る。どの村でもたくさん植えられているので、早い者勝ちでもいで味わう。大雨季になると、毎日数時間程度激しい【スコール】が降る。時折疾風が吹くのもこの時期で、木が倒れてくるのを恐れて森に入るのを避ける。雨季後半になると、川が増水して森に水が入る。その水が落水するのを見計らって【魚梁】を作って川に戻る魚を捉える。仏領時代にキリスト教が入っていて、【クリスマス】や【新年】を祝うのは日本におけるのと同じだ。

コンゴ河肺魚ぬたりと聖夜かな 高典

このように、最も大きな季節の変化は乾季から雨季へ、雨季から乾季への変化なのだが、それ以外にも一年のうち特定の時期にしか見られない様々な人事、動植物や天文現象が存在し、人々はそれを読みながら自然の成り行きに予想を立てて暮らしている。そしてそれらの中には歳時記のなかの季語であらわされていることと一致するものも少なくないのである。確かに歳時記の季語は、日本の生態環境に合わせたものだから、同じモノや事象が扱われていても、アフリカの現地とはタイミングがずれていることが多いのだが、それは読みかえることによって対応できるし、逆に温帯においては想像もつかぬような季語のイメージを引き出す機会にもなるはずである。ただ、「生活者の眼」で表現したいと思ったとき、同じ事物であっても、現地語でしか表現できない情感や意味があることに注意したい。例えば、アフリカデンキナマズを、「デンキナマズ」や学名で「*Malapterurus electricus*」と言うのと、「ビビ」（バカ語）や「ググ」（バクウェレ語）といった現地語で言うのとでは天と地ほどにちがうのである。運悪くデンキナマズに触ってしまったときの感覚、そしてそのことへの文化的含意が、現地語にはこめられている。そういった世界は安易な翻訳をすると説明的になるだけでなく、つまらなくなってしまうかねない。ローカルな豊かさをどのように俳句のなかで表現し、共有できるのかは大きな課題だと思う。

ところで、アフリカ俳句には、詠み手と対象の組み合わせにより、少なくとも次の四つが考えられる。一・アフリカで、日本人が詠む俳句、二・日本でア

フリカを詠んだ俳句、三、アフリカで、アフリカ人が詠む俳句。これらのうち、現状では一・と二・については既に少なくない数の句がつけられていると思われる。

冬初め阿弗利加の子にぬいぐるみ 高典

今後、とくに楽しみなのは三・のタイプのものが生まれてくることである。アフリカ大陸には長い人の居住史を反映して、言語のホットスポットとなっている。そういった言語やコミュニケーション形態は、まったく新しい俳句を生み出す可能性がある。例えば熱帯雨林のただなかで、トーン（音の高低）だけで数十km先までにメッセージを伝えることができる太鼓言葉というものがあるが、そのようなことばで俳句を作ったらどうなるか、などなど興味は尽きない。

#### 引用文献

- 有馬朗人・二〇〇〇。「私の俳句技法―海外吟が俳句に新しい一面を開く―」。『新日本大歳時記カラー版―夏―』講談社・三八頁。
- 篠原徹・二〇〇九。「解題」『伊谷純一郎著作集第〇巻…人類学と自然の旅』平凡社・四九二―四九九頁。
- 松井貴子・二〇一〇。「ハワイ俳句のためのノート」『外国文学』五九。宇都宮大学外国文学研究会。
- 福井咲久良・二〇〇九。「高浜虚子編『新歳時記』の三版種」『三田國文』（五〇）一―一三頁。慶應義塾大学国文学研究室。
- 土屋忍・二〇〇三。「南洋 高浜虚子と南洋俳句」『南洋の「夏」を遊びてモダニズム』『國文學…解釈と教材の研究』四八（五）…六四―七二頁。學燈社。
- 米山俊直・一九七七。『ザイル・ノート―アフリカー町と村と人と』サンケイ出版。